ΔFosBタンパク質を指標とした神経活動解析と胎仔 期微小粒子曝露により惹起される不安様行動との関 連

| 大夕データ | 言語: jpn | 出版者: 日本DOHaD研究会 | 公開日: 2018-03-09 | キーワード (Ja): | キーワード (En): | 作成者: 横田, 理, 押尾, 茂, 武田, 健 | メールアドレス: | 所属: | URL | http://hdl.handle.net/10271/3308

ΔFosBタンパク質を指標とした神経活動解析と胎仔期微小粒子曝露に より惹起される不安様行動との関連口

○横山山1·2、押尾茂1、武山健2·3 「奥羽」4/工業学部衛生化学445、2東京理(平才)学研究推進機構総合研究院、3山陽小野田市立山口東京理科大学口

【背景・目的】我々は、胎仔期 DEP 曝露が雄性産仔の衝動性や学習記憶に影響を及ぼすことを明らかにしてきたが、不安情動性に及ぼす影響については検討してこなかった。本研究では、胎仔期 DEP 曝露が出 牛仔の不安様行動に及ぼす影響について検討することを目的とした。

工 「方法】妊娠 ICR 系マウスに対して DEP を、皮下投与により曝露 (DEP 1 mg / kg body weight) した。オープンフィールド試験により雄性出生仔の自発運動量を、また、高架式十字迷路試験 (EPM) により不安様 行動を評価した。行動試験直後、脳を氷冷下で扁桃体、視床下部室傍核、縫線核を分画し、各試料中の Serotonin 量及びその代謝物量を HPLC 法により定量した。また、免疫組織化学染色により Serotonin と ΔFosB タンパク質の発現を解析した。 ロ

【結果】自発運動量は、両群とも有意な変化は認められなかった。一方、EPM において、DEP 曝露群は対照群と比べて、Open arm への侵入回数及び滞在時間の有意な減少が認められた。また、DEP 曝露群の 視床下部室傍核及び背側縫線核における Serotonin 量及びその代謝物量は有意な亢進を認めた。さらに、DEP 曝露マウス背側縫線核 Serotonin ニューロンでの ΔFosB タンパク質の発現亢進が観察された。ロ

【考察】行動解析により、胎仔期 DEP 曝露が仔の不安様行動を惹起した可能性を示唆した。実際に、DEP 曝露群の脳内セロトニン量の変化は、不安様行動で認められるその変化と類似の兆候を示した。特に DEP 曝露群の背側縫線核 Serotonin ニューロンにおける ΔFosB 発現割合が有意に増加していたことから、Setoronin ニューロン起始核の慢性的な活性化が不安様行動惹起に関与することが推察された。 口

(D)MRN

背景及び目的ロ

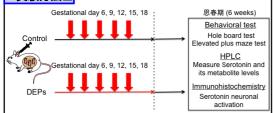
私たちは、ディーゼル排ガス (DE) 胎仔期曝露による雄性産仔の中枢神経系に与える影響を検討し、産仔の脳血管周囲顆粒細胞内の消化顆粒にディーゼル排気微粒子 (DEPs) 様物質が沈着することや、脳全域で末梢血管の微小梗塞を起こす所見を得ている。また、DE 胎仔期曝露により側坐核や線条体といった脳領域で Dopamine 神経機能が著しく低下することを表したのというというという。 認めている。これらのことから、胎仔期 DEPs 曝露が産仔の脳機能に様々な影響を与えることが推察された。□

Serotonin 神経は不安やうつ状態を調節するなど、心の健康に重要な機 能を持つことが知られている。Serotonin 神経は Dopamine 神経と相互作 用し合うことにより、その機能が調節されることが知られている。しかしなが 、DEPs 胎仔期曝露と不安情動性との関連性については未解明である。口

私たちは、DEPs 胎仔期曝露が産仔の Serotonin 神経系に影響を及ぼし 不安様行動をはじめとした情動系に影響を及ぼすのではないかと仮説を立 てた。本研究では、DEPs 胎仔期曝露による産仔の Serotonin 神経機能に対する影響について検討を行った。さらに、Serotonin 神経系と関連が深い と考えられている不安様行動との関係を検討するため Elevated plus



実験方法口



妊娠期 6,9,12,15,18 日に、1 日 1 回 200 mg/kg (計 1000 mg/kg) の DEPを ICR 妊娠マウスに皮下投与した。実験には、雄性産仔を用いた。こ の接度と近い曜霧濃度となる。雄性産仔は3週齢時に離乳し、6週齢よりの濃度と近い曜霧濃度となる。雄性産仔は3週齢時に離乳し、6週齢より行動試験を行った。まず、自発運動量を測定し、運動量の評価を行った。次に、不安情動性を評価するために、Elevated plus maze test を行った。全てのマウスは、行動試験を行う30分以上前に馴化させ、行動評価は2名によるブラインドにより行った。続いて、行動試験後のマウス脳サンブルを摘出した。ビブラトームにより切片を作成し、標的領域(ROI)をdissection した。分画部位は、Paraventricular nucleus of the hypothalamus (PVN, -0.70 mm); Amygdala (Amy, -0.94mm); Dorsal raphe nucleus (DRN, -4.60 mm); and Median raphe nucleus (MRN, -4.60 mm) の 4 領域である。この領域を 電気化学検出器付 HPLC により、Serotonin 量とその代謝物量を定量した。 また、固定した脳サンプルより凍結切片を作成し、Serotonin と FosB に対す る一次抗体とビオチン化標識した二次抗体を反応させて、DAB 法により発 色した。口

結論口

本研究の結果、胎仔期ディーゼル排気微粒子曝露が、次世代の不安 様行動を惹起することが示唆された。また、この影響は、脳内 Serotonin 神経系の変化に起因する可能性が示唆された。 さらに、Serotonin 神経 系の起始核である DRN において、慢性的な Serotonin ニューロンの活 性化が認められ、それが原因で投射先である PVN における Serotonin 量の亢進が認められた可能性が考えられた。

Yokota S, Oshio S, Takeda K. In utero exposure to diesel exhaust particles induces anxiogenic effects on male offspring via chronic activation of serotonergic neuron in dorsal raphe nucleus. J Toxicol Sci. 2016; 41(5): 583-93. doi: 10.2131/jts.41.583. □

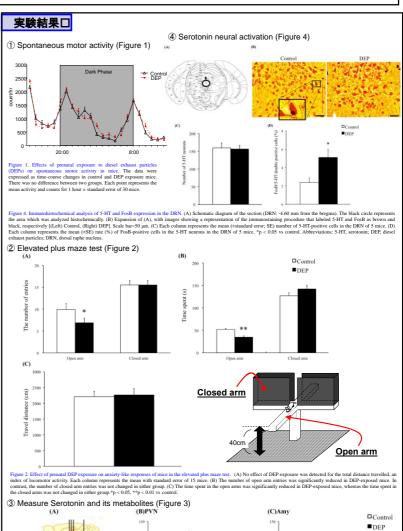


Figure 3. Effects of prenatal DEP exposure on ascending 5-HT systems in male offspring. (A) Schematic diagram of the brain. The positions of dissection were shown. (B) Prenatal exposure to DEP significantly increased 5-HT levels, but not 3-HIAA levels, in the PVN. (C, D) No effect of DEP exposure was detected in either 5-HT of 5-HIAA levels in the Amy (C) and MRN (D), (E) Perenatal exposure to DEP significantly increased both 5-HT and 5-HIAA levels in the DRN. Each column represents the angle guidni with standard error of 10 mice. *p < 0.05 vs control. Abbreviations: 5-HT, sertosini; 5-HIAA, 5-hydroxyindole-3-acetic acid; Amy, amygdala; DEP, diesel exhaust particles; DRN, dorsal raphe nucleus; MRN, paraventricular meucleus of the hypothalamus.

(E)DRN